筆跡から解けた八代の妙見ミステリー

すっきり完全解決！とはいかないものの、本展覧会の準備過程で新たにわかったことがある。「中宮并下宮願文写」（写真右上）の作者をめぐる問題はその一つだ。

八代妙見宮には上宮（古麓町）・中宮（妙見町）・下宮（宮地町、現八代神社）の三つの「宮」がある。貞享３年(1686)に妙見宮神宮寺住職の良尋が記した『妙見大菩薩縁起』※によれば、上宮は延暦 14 年（795）、中宮は永暦元年（1160）、下宮は文治２年（1186）に建立されたという。これについて、良尋は「上宮草創の記録は失墜して残っていないのでわからない。しかし、中宮と下宮については建立年とその際の記録を〝写シテ〟神職の家に残されている」と記している。

※現存最古の妙見宮の由緒記録。八代市教育委員会『八代市文化財調査報告書第 43 集八代妙見祭』、2010 年に全文翻刻所収。

この〝写（うつし）〟に相当するのが、この「中宮并下宮願文写」だ。ここには、中宮と下宮それぞれの創建時に奉じられた願文が記されている。前半の「肥後州八代妙見中宮御願文之写」は「永暦元年（1160）庚辰三月十八日」の「従五位上行（平）肥後守貞能朝臣」が奉じたもの、後半の「下宮願文之写」は「文治二（1186）丙午年十一月十五日」に「検校散位大江朝臣」が奉じたという内容。良尋はこれを中宮・下宮の由緒を証明記録と位置付けたのだ。以来、江戸時代中期の地誌『肥後国誌』でもこの内容が引用されるなど、妙見宮の歴史を示す根本資料の一つとされてきた。

しかし、そもそもこの〝写〟には書写年代や筆者に関する記述がなく、いつ誰が作成したものなのかはハッキリしていなかった。近年の報告書等でも、この点が問題にされた形跡はない。貞享３年に良尋がこの〝写〟の存在を明記しているから、理論上はそれより古いもののはずだが、はたして…。

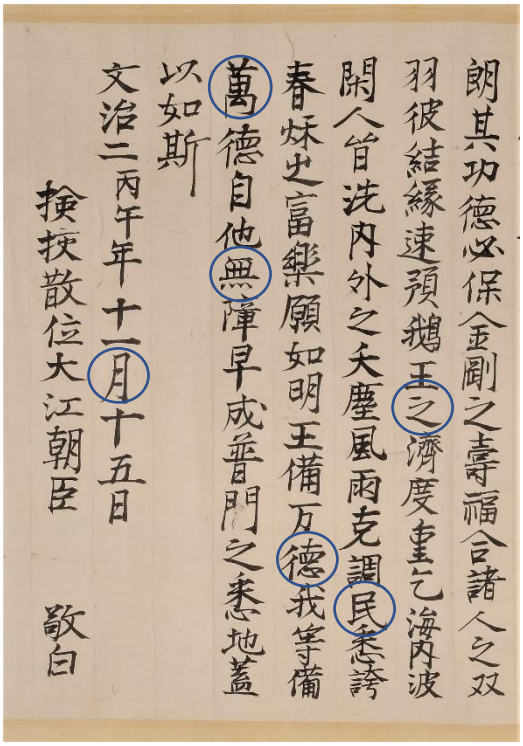
と、頭の片隅で悩み続けていたある日、万治元年（1658）に同じく良尋が書き記した『八代墾田記』（写真右下）の解読作業中にハッと気づいた。それが「中宮并下宮願文写」の筆跡とそっくりであることに。

いずれも格調ある美しい楷書で記されているが、よくよく見比べてみると、筆の運び方、字形が全く同じ。右に〇で示したとおり、特徴的な「之」「無」「徳」「萬」「月」「民」などの字を比べてみるとよくわかる。ということは、まさか…。

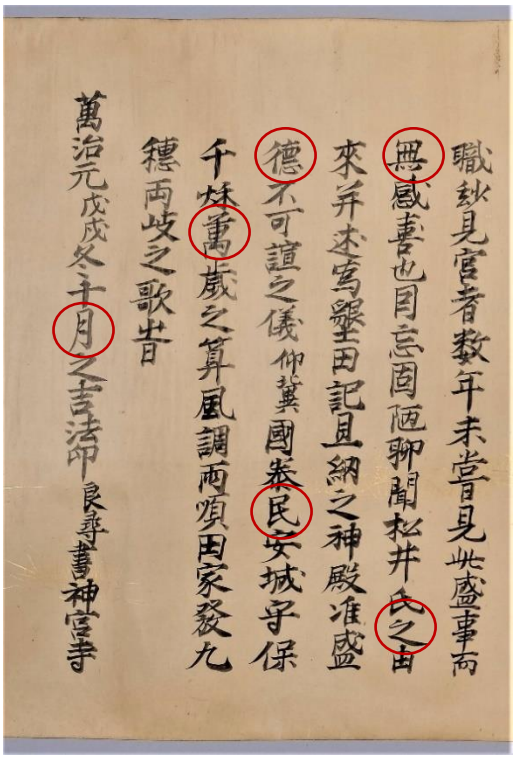
そう、先の「中宮并下宮願文写」を書写したのも良尋。貞享３年段階で〝写〟の存在を証言していた良尋自身が、実はその作者だったのだ。確かに元々「写シテ」と書いてあったが、まさかその主語が良尋だとは。証言者自身が実は実行者だったという、まさにミステリー的展開。ささやかであるが、妙見宮の歴史を示す根本資料の謎が一つ解けた。

重要なのは、これは本文活字をいくら見てもわからない、実物・原本だからこそ解明できたということ。やはり実物でなければわからないことがあるのだ。「ホンモノ」を扱う博物館の意義・役割はまさにここにある。大袈裟かもしれないが。

【主幹（学芸員）　鳥津亮二】



中宮并下宮願文写（奥書部分）
江戸時代（17 世紀）　八代市・八代神社蔵
出品番号 13



八代墾田記（奥書部分）
万治元年（1658）　八代市・医王寺蔵
出品番号 40